

スペインと日本の初等美術教育の比較(2)

—工作指導に関わる題材の分析を中心として—

網谷 夏実, 隅 敦

Comparison of Art Education in Elementary school between Spain and Japan

—Analysis of the subject matter in handicraft practice—

Natsumi. AMITANI, Atsushi. SUMI

要 約

本研究は、拙稿「スペインと日本の初等美術教育の比較(1) —描画指導に関わる題材の分析を中心として—」の継続研究であり、スペインの初等美術教科書における題材の特徴を、主として工作指導に関わる題材の分析を通して、日本の教科書題材との違いに焦点を当てながら、明らかにしようとした。まず、スペインの工作指導に関わる題材について、(1)人形を作る題材、(2)お面を作る題材、(3)動くおもちゃを作る題材に分類し、実際に制作を行いながら、詳細な分析と考察を行った。次に、両国の題材について、活動内容や使用する用具が類似しているものを取り上げ、比較を行った。一方で、スペインの教科書で特徴的であった組み立て式題材について、日本の教科書で扱われていない理由と、学校教育におけるセット教材の存在についての考察を行った。

キーワード：スペイン、美術教科書、図画工作科、学習指導要領、紙工作、立版古

keywords：Spain, Art Textbook, Art and Handicraft Subject, Course of Study, Paper craft

はじめに

スペインの初等美術教科書について、前回は描画題材を中心に研究を行った¹。そこでは教科書題材を実際に制作し、その内容に関する傾向の分析を試みた。また、両国の教科書の中で似た内容を取り扱っている題材を取り上げ、比較・分析を行った。

今回は、工作指導に関わる題材の分析を行う。前回と同様に、教科書題材を実際に制作し、比較・分析を行った。複数の出版社のスペインの初等美術教科書を見ると、そのほとんどで教科書の絵を切り取って組み立てる題材が取り扱われていた²。中でも、比較的日本の教科書題材と比べやすく、似た内容も盛り込まれている Santillana 社の教科書を分析対象に選び、詳細な分析を行った。

1. 先行研究について

スペインの美術教育について、教科書分析を中心に行っている先行研究としては、藤井康子と金子亨の論文³が詳しい。

「スペインの美術教育の現状 I —教科書分析を中心として ①初等教育の段階—」では、スペインの

小学校で使われている教科書使用し、その教育観と内容の分析⁴を行っている。工作の題材における分析では、「スペインでは日本のように技術・家庭科がないためか、表現というよりは技術的な内容が濃くなっている」とし、「日本の教育で言われる『つくる力』との違いは、最初から創意工夫して形にする、作り上げるというのではなく、既に計算されて作られたものを切り取り立体物にするという『組み立てる力』を重視している点」だと指摘⁵する。その目的は、「切り取る、折り曲げる、貼り付けるといった基本的な能力と、はさみ、糊等用具の使用法と習得、組み立てるプロセスを考え理解すること」だと説明⁶している。また、これらの概念の根底には、構成主義の影響から、実用性の高い題材が選択されるという「『生活のための工芸』、『生活に役立つ美術』」があると指摘⁷する。

「スペインの美術教育の現状Ⅲ —教科書における基礎的な力の育成について(初等教育)—」では、Santillana 社と ANAYA 社の二社の美術教科書を使用し、特徴的な内容を取り上げ、分析⁸を行っている。「工作の学習は、創造的なもの、機能的なも

の、そして構築的なものを作るといった主に三つの工作練習で構成されている」とし、「ここでは目的に適した美的条件や機能的条件、制作プロセスについて考える力を育成し、立体的なものの構造を理解させるための工作の題材が多く設けられている」⁹という。組み立て式の題材については、「目的は『広げる』『重ね合わせる』『折りたたむ』という作業を通した柔軟な手の動きの獲得」だとし、「平面から立体になる関係・過程を理解させるための学習」だと説明¹⁰している。

「スペインの美術教育の現状Ⅳ —初等美術教科書にみられる教育内容の一例—」では、エスエム社とルイスヴィヴェス社の2社の初等美術教科書の概要を示し、教材の教育目的を考察¹¹している。

「工作の教育目標」では、「①集中力と手の巧みさの養成」、「②制作プロセスの理解」、「③論理的・数理的な思考力の育成」という三点¹²を挙げている。これら三点についての説明¹³では、①について「手による単純作業・補助器具を併用する技法を上達させ、知覚・認識能力を向上させる。作品を完成させるための集中力を養う」、②について「完成作品を創造し実現させるプロセスの思考と理解」、③について「材料の加工と構築の仕方によって、様々な空間構造が生まれることを直感的に把握させる。生活に役立ち、生活を彩る作品制作を重視する」と述べている。

以上のように、藤井康子と金子亨は各研究において、スペインの美術教科書内容について言及している。工作の題材については、表現というよりは技術的な内容が重視され、既に作られたものを組み立てる能力や用具の使用法の習得が目的とされていると分析している。

2. 分析対象の初等美術教科書の概要

本分析に使用した教科書は、Santillana社の『Dibujo y pintura 2 PRIMARIA』2007年版である。詳細については、「スペインと日本の初等美術の比較(1) —描画指導に関わる題材の分析を中心として—」¹⁴においても示した。

教科書の内容は、二次元の題材を扱う「Dibujo(素描)」と三次元の題材を扱う「Construcción(組み立て)」の二つのブロックに分けられているが、本研究では、工作指導に関わる「Construcción(組み立て)」のブロックに分類されている題材につ

いて取り上げる。

本研究では、日本の現在の初等美術教育の視点に立ち、スペインの初等美術教科書の分析を試みた。そこで、両国の教科書内容について、日本の現行の学習指導要領を基に、「造形遊び」、「絵に表す活動」、「立体に表す活動」、「工作に表す活動」、「鑑賞する活動」の五項目で分類し、表に整理した¹⁵。すると、分析対象のスペインの教科書内容は、絵に表すと工作に表すが中心であり、「TRIDIMENSIONALIDAD(三次元)」に属す題材のほとんどが、工作に表す題材であった¹⁶。その中で特徴的な題材を取り上げ、考察を行う。

3. スペインの教科書における「工作に表す題材」の分析

工作に表す題材の特徴を分析するため、(1)人形を作る題材、(2)お面を作る題材、(3)動くおもちゃを作る題材の三つに分類した。題材の制作過程を取り上げながら、その内容を考察する。

日本の図画工作科の教科書では、制作方法や、用具や材料の使い方が各題材や巻末資料において示されており、教師用指導書がなくても指導できるように構成されている¹⁷。そこで、日本の教科書と同様の扱いとし、教師用指導書を使用せずに制作を行った。なお、制作では、教科書本体ではなく、教科書を厚紙に印刷したものを使用した。

(1) 人形を作る題材

ア「Personajes divertidos (愉快な人物)」

「Personajes divertidos (愉快な人物)」は、人形を作る題材である。教科書に印刷された絵を切り取り、完成写真を見ながら好きな部品を組み合わせたたり、必要な材料を加えたりして制作する。以下に、実際の制作過程を示す。



図1 「Personajes divertidos (愉快な人物)」 p.43

【材料】

教科書を印刷したもの、色画用紙、不織布、割り箸、輪ゴム

【用具】

はさみ、カッターナイフ、のり、セロハンテープ、ステープラ

【制作過程】

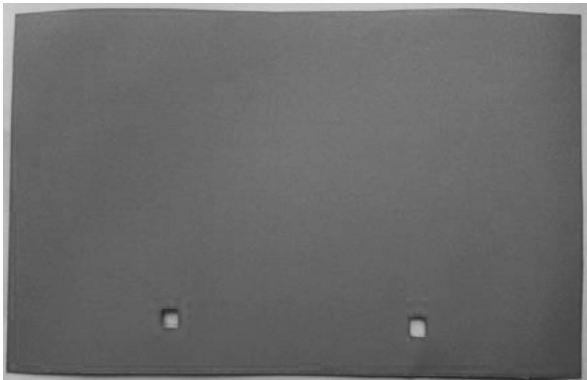
①教科書から必要な材料を切り取る。

教科書の作品例を参考に、顔や手のパーツなど必要な材料をはさみで切り取った。



②顔の土台と手の仕組みを作る。

顔の土台となる画用紙を長方形に切り、腕となる割り箸が通るように、カッターナイフで小さな穴を



作った。

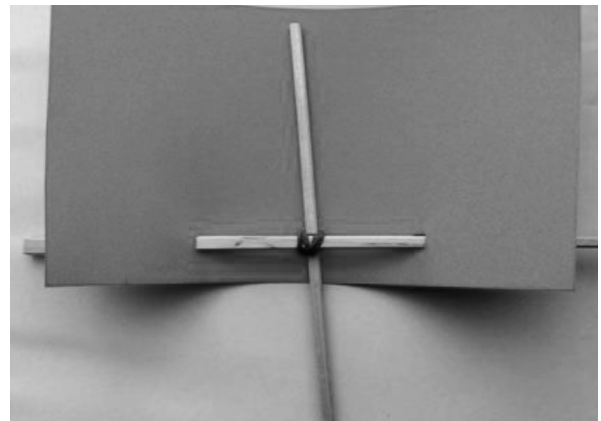
③人形の手となる棒の仕組みをつくる。

教科書には、人形の手の部分となる棒と持ち手用の棒に関する説明はなかった。そこで、割り箸を輪ゴムで十字に留め、棒の仕組みを作った。



④顔の部分を丸め、筒状にする。

顔の土台となる画用紙の穴に、割り箸で作った棒を通した。画用紙を筒状に丸め、ステープラで留めた。



⑤好きな材料を使って装飾する。

顔の正面には、最初の工程で切り取った口ひげ、口、手をはりつけた。また、教科書の作品例を参考にし、色画用紙や不織布を用い、マントや髪の装飾を施した。



イ 人形を作る題材の考察

まず、教科書のパーツについて考察する。細かいパーツが多く、慎重に切り取る必要があった。まっげには、細かいギザギザの部分があるなど、2年生の段階の子どもたちにとっては、少し難しいと推察する。

次に、棒について考察する。教科書の作品では、手の部分と持ち手の部分の2本の棒が使用されている。しかし、どのように接合するのかの説明はなく、顔の中の構造は分からない。子どもたちが作品を制作するときには、作り方の指導が必要である。また、正面からは見えない構造部分を可視化する必要があると考える。

最後に、装飾について考察する。目や口は、いくつかのパーツの中から自分の好きなものを選んで組み合わせることができ、髪や鼻、マントなどは好きな材料を使って装飾することができる。この装飾が、主に子どもたち一人ひとりの発想や構想の能力が発揮される工程であると言える。しかし、教科書のパーツをベースに作っているため、好きな装飾を施したとしても、友達同士で似たような作品ばかりできてしまう可能性がある。

制作活動全体を通して、細かい作業が中心で、技能が必要な題材であった。この年齢の段階を考慮すると、難易度が少し高い題材であると言える。

(2) お面を作る題材

ア「Una careta de pirata (海賊マスク)」

「Una careta de pirata (海賊マスク)」は、海賊のお面を作る題材である。教科書に印刷された海賊の顔を切り取り、耳の部分に輪ゴムを取り付けて制作する。以下に、実際の制作過程を示す。



図2「Una careta de pirata (海賊マスク)」 p.45

【材料】

教科書を印刷したもの、輪ゴム、つまようじ

【用具】

はさみ、カッターナイフ

【制作過程】

①マスクを切り取り、カッターナイフで目と鼻を切る。

マスクをはさみで切り取り、カッターナイフで目と鼻に切り込みを入れた。目と鼻の部分には、白い点線が引かれており、線に沿って切り込みを入れた。



②耳に引っ掛ける部分をつくる。

教科書の作品例からは耳の構造が判断できず、部品を自ら考案した。お面の耳の部分には白い点があり、カッターナイフで×印をつけ、穴をあけた。そして、つまようじを半分におり、輪ゴムを結びつけ、穴をあけた部分に通した。



【完成作品画像】



イ お面を作る題材の考察

この題材の問題点として、鑑賞の問題がある。お面を完成させたとき、皆全く同じものができてしまうため、鑑賞では‘できる’‘できない’で判断されてしまう可能性がある。同じく、評価においても、皆同じものを制作するため、正確に上手く制作できたかどうかで判断される可能性がある。装飾の部分を作るなど、子どもが工夫できるような要素を取り入れるべきだと考える。

この題材からは、手本通りに正確につくることが重視されていることが伺える。子どもの創造性よりも、技術の習得を目的とした題材が取り扱われている。

(3) 動くおもちゃを作る題材

動くおもちゃを作る題材として、二つの題材「Escenario especial (宇宙の状況)」と「Un coche de aventura (車の冒険)」を取り上げ、制作と考察を行った。

ア 「Escenario especial (宇宙の状況)」

「Escenario especial (宇宙の状況)」は、宇宙の模型を作る題材である。教科書に印刷されたロケットやトラックなどの部品を切り取り、土台となる絵に貼り付けて組み立てる。ロケットには、上下に可動する仕組みを作る。以下に、実際の制作過程を示す。



図3 「Escenario especial (宇宙の状況)」 p.51

【材料】

教科書を印刷したもの、割りピン

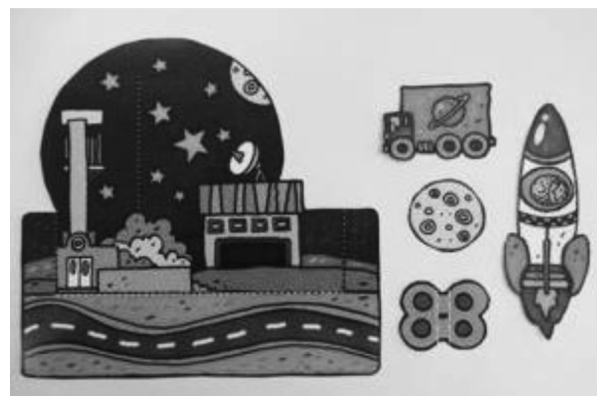
【用具】

カッターナイフ、はさみ、のり

【制作過程】

①教科書から材料を切り取る。

ロケットなど、必要な材料をはさみで切り取った。



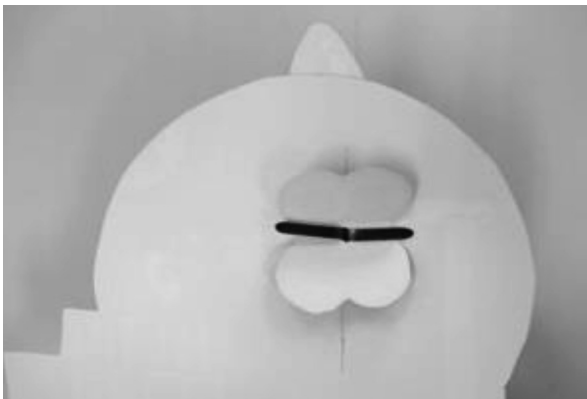
②はさみやカッターナイフで切り込みを入れる。

①で切り取った材料に、はさみやカッターナイフで切り込みを入れた。



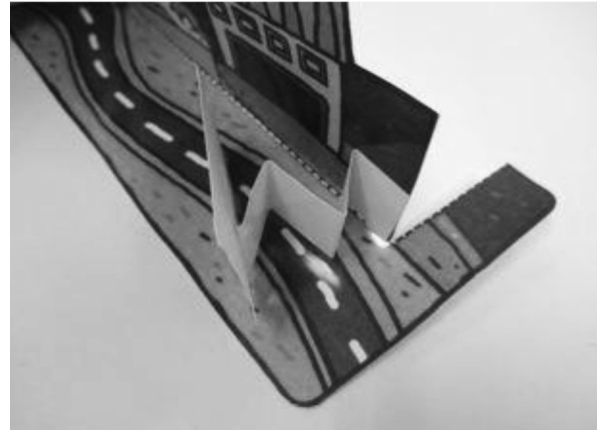
③ロケットに割りピンをつける。

可動する仕組みをつくるため、図のように、ロケットの部分に割りピンを取り付けた。



④装飾を施す。

月とトラックを装飾として貼り付けた。教科書に印刷された見本を見ると、少し飛び出ているように見えるため、細長い紙をジグザグに折り、飛び出す仕組みを作った。



⑤可動部分の切り込みの幅を大きくする。

ロケットを動かして見たところ、全く動かなかったため、可動部分の切り込みの幅を大きくし、スムーズに動くようにした。



【完成作品画像】



イ 「Un coche de aventura (車の冒険)」

「Un coche de aventura (車の冒険)」は、車の模型を作る題材である。教科書に印刷された車の部品を切り取り、組み立てる。車輪の部分には割りピンを使用し、可動する仕組みを作る。以下に、実際の制作過程を示す。



図4 「Un coche de aventura (車の冒険)」 p.53

【材料】

教科書を印刷したもの、割りピン

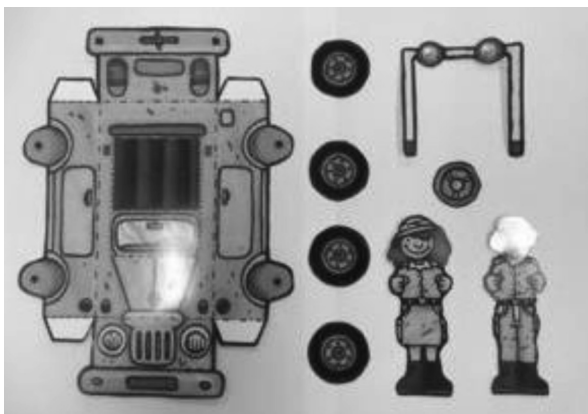
【用具】

はさみ、のり、カッターナイフ

【制作過程】

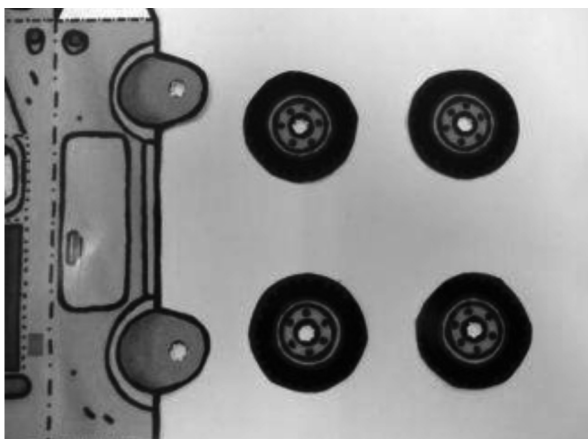
①教科書から材料を切り取る。

教科書を印刷したものから、車の本体や車輪、人物など必要な材料をはさみで切り取った。



②車輪の取り付け部分に穴を開ける。

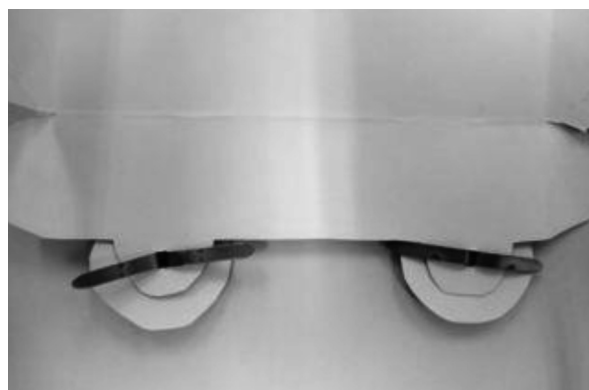
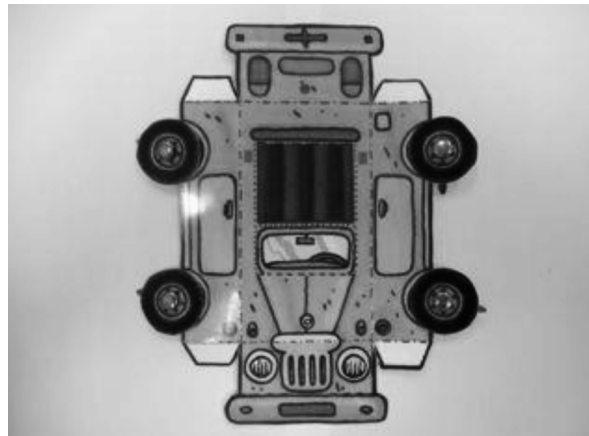
車輪を取り付ける箇所に、カッターナイフで小さ



な穴を作った。また、車の本体の窓の部分と、座席の部分に、切り込みを入れた。

③車輪に割りピンをつける。

②であけた穴の部分に、割りピンを取り付けた。



④車を組み立て、装飾を施す。

②で車に切り込みを入れた部分を折り曲げ、窓と座席をつくった。また、車を組み立てた後、女の子と棒、ハンドル装飾を施した。



ウ 動くおもちゃを作る題材の考察

取り上げた二つの題材を踏まえ、考察を行う。「Escenario especial (宇宙の状況)」は、宇宙の模型を作る題材である。作り方の説明はなく、手本の

写真を参考にし、制作を進めた。問題のあった作業は、「⑤可動部分の切り込みの幅を大きくする」である。割りピンを使用し、ロケットを取り付け動かしてみると、全く動かなかった。その原因は可動部分の切り込みの幅が小さかったことにある。そのため、切り込みの幅を大きくし、スムーズに上下に動くように改善した。

組み立て式であるため、土台の部分は簡単に作ることができた。しかし、先に指摘した可動部分や、装飾の月やトラックが飛び出す部分など、細かい部分で指示が書かれていなかったため、手探りで制作しなければならなかった。子どもが仕組みを理解しながら制作できるように、過程を示したり、手本の完成写真を大きく載せたりなどの配慮が必要だと考える。

もう一方の、「Un coche de aventura (車の冒険)」は、車の模型を作る題材であった。問題があった作業は、「②車輪の取り付け部分に穴を開ける」である。車輪を取り付ける箇所に穴をあける際、カッターナイフを使用した。すると、細かい作業が難しく、穴をきれいに切り取ることが困難であった。二穴パンチなど、穴のあけやすい道具を使用するとよいと考える。

以上、二つの題材の考察において、その問題点を指摘した。動くおもちゃを作る題材は、切り取る作業が主であり、大枠は簡単に作ることができる一方、細かい作業については配慮がなされておらず、作り方が示されていないため、手探りで制作を進めなければならないという問題があった。また、細かい作業が求められていることから、発達段階に応じた題材を考えていく必要があると考察する。

4. 日本とスペインの初等美術教科書題材の比較

日本とスペインの教科書題材の比較を行う。比較する題材は、スペインの教科書題材の中で、日本の現行の学習指導要領を基に分類した両国の初等美術教科書内容の項目別統計表¹⁸から「工作に表す題材」に分類されたものと、日本の教科書の中で、活動内容や使用する用具が類似している題材を選んだ。

(1) 両国の工作に表す題材の比較

スペインの題材「Una marioneta famosa (有名な人形)」と日本の題材「動き出すストーリー」(日本造形教育研究会『図画工作 5・6 下 ゆめを広げ

て』、開隆堂出版、2012、pp.16-17)を比較する。スペインの題材は、教科書に印刷された部品を切り取り、割りピンを使用し可動する仕組みを持つ人形を作る題材である。一方、日本の題材は、割りピンを使用して仕組みをつくり、可動するおもちゃをつくる題材である。どちらの題材も割りピンを使用し、可動部分のある作品をつくる点で共通している。

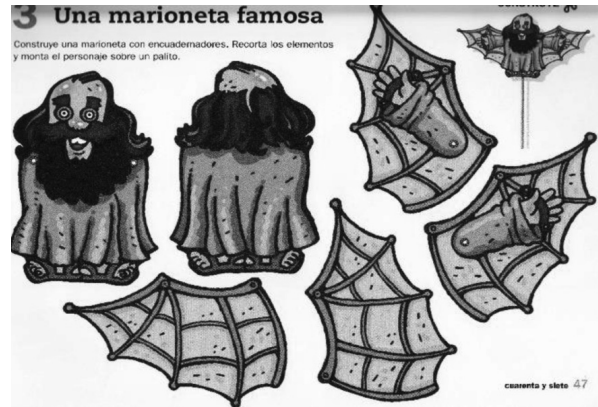


図5 「Una marioneta famosa (有名な人形)」 p.47

【比較題材】

スペイン：「Una marioneta famosa (有名な人形)」2年, Santillana

日本：「動き出すストーリー」5・6下 (工作に表す活動)、開隆堂出版

【材料・用具】

スペイン：教科書を印刷したもの、割りピン、紐、ストロー、割り箸、はさみ、のり、二穴パンチ、セロハンテープ

日本：色画用紙、割りピン、紐、ストロー、はさみ、のり、二穴パンチ、押しピン、マーカー、セロハンテープ

【制作過程】

◇スペインの題材の制作過程

①人形を切り取る。

教科書を印刷したものをはさみで切り取り、両面に貼り付けた。そして、割りピンと紐を通すために、翼の白い丸がある部分と、その下の部分の2カ所に二穴パンチで穴をあけた。



②穴に紐と割ピンを通し、動く仕組みを作る。

画像のように、穴に紐と割りピンを通し動く仕組みを作った。動く仕組みは、開隆堂5・6下「動き出すストーリー」の仕組みを参考にした。教科書の完成作品の写真には、持ち手用の棒がついていたので、人形に割り箸を取り付けた。



【完成作品画像】



◇日本の題材の制作過程

①色画用紙で人形の形を作る。

色画用紙で、人形の頭、腕、胴体などの部品を制作した。



②動く仕組みを作る。

教科書の仕組みの説明を参考に、動く仕組みを制作した。



【完成作品画像】



(2) 両国の工作に表す題材の比較についての考察

スペインの題材には、作り方についての記述はなかった。そこで、開隆堂5・6下の「動き出すストーリー」を参考にし、制作を行った。スペインの題材は、開隆堂の教科書の「チアリーダー」という作品例と類似しており、同じように割りピンをつけ、ストローに紐を通し動く仕組みをつくった。

題材の説明には、「Utilización de diferentes materiales para hacer una marioneta de palo con partes móviles. (動いている部分と人形を作るためにさまざまな材料を使用する。)」とある。作業自体は難しくないが、作り方を理解していないと制作は難しい。動く仕組みについての説明を、分かりやすく提示する必要があると考える。

スペインの教科書では、この題材を2年生で扱っているのに対し、日本の教科書では5・6下つまり高学年で似た題材を扱っている。日本の題材「動き出すストーリー」では、動く仕組みを理解させた後、自分のアイデアで動きを生かした作品を作る一方、スペインの題材「Una marioneta famosa (有名な人形)」では、動く仕組みや作り方の説明はなく、全員が同じものを作る切り取り式だということに違いがある。

5. 日本の教科書では扱われていないスペインの組み立て式題材の考察

現在の日本でも、そのまま材料を切り抜いて組み立てる「組み立て式」の玩具は、児童向けの雑誌の付録などで扱われている。しかし、教科書では扱われていない。では、なぜ現在の日本の教科書には、組み立て式題材は扱われていないのか。その理由は明らかにされていない。しかし、歴史やその影響、学校教育における捉え方を踏まえ、考察を行いたい。

前回の研究では、分析対象のスペインの初等美術教科書の描画題材で特徴的であった「ぬり絵」について考察を行った¹⁹。そこでは、「ぬり絵」が日本の教科書で扱われていない理由として、四点を挙げた。それは、①自由画教育運動、②玩具として認識されていること、③教育的効果に対する否定的な意見、④評価を伴う場合の問題²⁰である。組み立て式題材においても指摘した四つの理由が当てはまると推察される。ここでは、「②玩具として認識されていること」、「③教育的効果に対する否定的な意見」の二点を取り上げる。

(1) 玩具として認識されていること

「②玩具として認識されていること」については、組み立て式の玩具の歴史から考察することができる。江戸時代、「組み立て絵(組上絵、立版古)」と呼ばれるものがあった²¹。「組み立て絵」は、子どもの手遊び用の浮世絵である「おもちゃ絵」の一種で、

「立版(たてばん)古(こ)」は、版こ(版画)を立てるという意味で、上方(かみがた)での呼称である²²。初めは、茶室の出来上がりの模型として考案された²³。人物や家屋などを描いた錦絵を、ハサミで裁ち、糊で張り合わせて、台紙の上に芝居の舞台面のように組み立てる²⁴。出来上がったその作品は、燈籠飾りとして遊ばれ、江戸時代から大正の中ごろまで、子どもの夏の遊びとして大いに流行したと言う²⁵。

やがて姿を消したものの、昭和になり、児童向けの雑誌の組み立て式の付録として再び注目を浴びるようになった。上笙一郎によると、児童向け雑誌の付録が始まったのは、明治23(1890)2月号の「少国民」であり、立太子祝賀と国会開設を記念し、神武天皇をふり出しとし国会開設を上りとする歴史双六が最初だという²⁶。『子ども遊び集：明治・大正・昭和』(平凡社、1985)には、「昭和六年四月、人気雑誌『少年倶楽部』が付録として『大飛行艇ドックス号』をつけ、アッといわせた。中村星果苦心の考案になるこの組立模型は、おもちゃ絵の伝統をここに甦えさせた」²⁷とある。江戸時代の「おもちゃ絵」から時を経て、『少年倶楽部』で組み立て式の飛行艇の模型が扱われたことがきっかけとなり、組み立て式の付録が玩具の一つとして浸透していったのである。

このように、組み立て式の玩具が「組み立て絵(組上絵、立版古)」として江戸時代から親しまれ、やがて姿を消したものの、昭和になり、児童向けの雑誌の組み立て式の付録として再び注目を浴びるようになったという歴史が理由として挙げられる。

(2) 教育的効果に対する否定的な意見

「③教育的効果に対する否定的な意見」については、ローウェンフェルドの指摘がある。ローウェンフェルドは、著書『子どもの絵』の中で「切り抜きとお手本について」述べている²⁸。彼が二年生のクラスを訪れた際に、教室のまわりにイースターのうさぎの切り抜きを塗ったものが貼ってあるのを見て、ある子どもに「どれがあなたの？」と尋ねると、一度は「知らない」と答えたが、突然頬を赤くさせて、汚れた跡がついているものが自分の作品だと答えたというエピソードを述べている²⁹。彼はこの先生の教え方を批判し、このような教室では、全体主義的思考に生徒を導き、表現方法が組織化され、自分の

表現に自信を失ってしまうにちがいないと指摘する³⁰。また、「子どもは、お手本を与えられることになってしまうと、いつもお手本を期待するようになり、お手本がひっこめられると、どうしてよいかわからなくなり、想像力をひとりで働かせる自信をなくして」しまうとし、「自分で絵をかいて、その線を切るほうが、“きめられた”またあまりわかりよくない線を切るより、ずっと注意ぶかく」できると述べている³¹。

このように、ローウェンフェルドは画一的なものを切り抜く題材が扱われることを批判し、全体主義的考えに生徒を導くことや、表現方法が組織化され、自分の表現に自信を失うことを懸念している。以上のような否定的な意見の存在が理由に挙げられると考察する。

6. 日本における組み立て式題材に関する問題点

前述の「5. 日本では扱われていないスペインの組み立て式題材の考察」において、日本の教科書には、組み立て式題材が取り扱われていないと述べた。しかし、業者が題材に応じたセット教材を販売しており、現場ではそれを用いて指導する場合も少なくない³²。学校教材カタログである『2014小学校 生活科・理科・図工・教材カタログ クラフテリオ』³³では、学年別・教科別・教科書別のセット教材が販売されている。図画工作科のセット教材を見ると、制作に必要な材料が、必要分準備され、あらかじめ使いやすいように加工された状態でセットになっている。このカタログの中には「組み立て式」のセット教材も販売されている。「ゆめのまちさんちょうめ A」³⁴は、開隆堂出版の1・2上の題材「ゆめのまちさんちょうめ」³⁵に準拠したセット教材である。この題材は、「空き箱の形を生かしたり、切り分けたり、つないだりして、自分が暮らしてみたいと思う家や建物をつくる内容」³⁶である。このセット教材には、「家台紙セット」という簡単に家の形が組み立てられるパーツが含まれている。「へんそうかめん」³⁷は、東京書籍の1・2の「かおカオ顔」³⁸に準拠したセット教材である。型抜き加工済みの「お面台紙」が含まれ、簡単に丸み帯びた立体的なお面を制作することができる。

スペインの組み立て式題材と日本のセット教材を比較すると、スペインは教科書に印刷された絵を切り取り組み立てるだけで完成することが多いが、日

本は既に切り取られた台紙を組み立て、後で自ら着色や装飾をする過程が加わっている。着色や装飾がある点では、日本の方が、子どもの創造性を発揮できる場面があると言えるが、同じ型紙と材料を使用するため、子ども同士似たような作品ばかりできてしまう可能性が高い。

セット教材は、必要な材料が定量化されていることから利便的である一方で、子どもたちが自ら材料を選び、器具を使って加工していく場面が少なくなることが懸念される。

セット教材の問題点として「技能を発揮する機会の減少」「材料の追加の困難さ」「完成作品が似たようなものになりやすい」ことが挙げられる³⁹。子どもたちの発想や構想の能力、技能の習得の観点からすると、加工された台紙のある組み立て式のセット教材をそのまま利用することには注意が必要である。

7. まとめ

本研究では、分析対象とするスペインの教科書の工作に表す題材を、(1)人形を作る題材、(2)お面を作る題材、(3)動くおもちゃを作る題材の三つに分類し分析を行ったが、取り上げた全ての題材が組み立て式であり、日本の教科書題材とは対照的であると言える。藤井・金子が指摘するように、既に計算されて作られたものを組み立てる作業を通して基本的な技能や集中力を育成することが目的とされており、子どもが自ら作ることよりも『『子どもに教える』といった教師のための活動・指導法』が重視されている⁴⁰。

題材分析においては、実際に制作を行い、指導場面を想定しながら考察を行ったが、発達段階を考慮し、作り方や仕組みの説明を加えるなど子どもが理解しながら制作できるような改善が求められる。教師側の視点ではなく、子ども側の視点に立った配慮が必要である。

最後に、日本における組み立て式のセット教材の問題を指摘した。組み立て式の題材については、分析対象のスペインの教科書だけの問題だと捉えるのではなく、日本においても同様の課題として捉えていく必要がある。今後も、教科書題材の分析を進め、その動向を明らかにしていきたい。

謝辞

本研究の執筆にあたり、富山大学人間発達科学研

究科に留学中であるスペイン出身のソフィア・パストル・マタモロス氏にご協力頂きました。心から感謝申し上げます。

註

1 網谷夏実, 隅敦「スペインと日本の初等美術教育の比較 (1) —描画指導に関わる題材の分析を中心として—」『富山大学人間発達科学部紀要 9 (1)』2014, pp.93-106

2 スペインの小学校2年生の美術教科書を見ると, sm 社, ANAYA 社, edebé 社, everest 社では, 教科書の絵を切り取り組み立てる題材が取り扱われていた。例として, sm 『plástica PROYECTO TRAMPOLÍN』(2010) では, 割りピンを使って人形を作る題材やお城の模型を作る題材, ANAYA 『Primaria/Primer ciclo Plástica 2』(2011) では, 家の模型やパズルを作る題材, edebé 『Plástica 2』(2007) では, 街の模型やインディアンが身につける飾りを作る題材, everest 『Proyecto Musart Plástica 2 Primaria/Primer ciclo』(2007) では, 家やお面, 風車を作る題材などが取り扱われていた。

一方, Bruño 社と EDELVIVES 社の教科書では, 組み立て式の題材は取り扱われていなかった。Bruño 『Plástica 2』(2008) では, 木製のへらを飾りつけて人形を作る題材やゴム風船に米を詰め込んでジャグリングボールを作る題材などが扱われていた。また, EDELVIVES 『PLÁSTICA 02 Mundo Agua Primaria』(2007) では, プラスチックスプーンやフォークで人形を作る題材, 粘土でキーホルダーを作る題材などが扱われていた。

3 金子亨・藤井康子「スペインの美術教育の現状 I 一教科書分析を中心として ①初等教育の段階一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系57』2005, pp.133-146

藤井康子・金子亨「スペインの美術教育の現状 III 一教科書における基礎的な力の育成について (初等教育) 一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系59』2007, pp.25-42

金子亨・藤井康子「スペインの美術教育の現状 IV 一初等美術教科書にみられる教育内容の一例一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系60』2008, pp.67-80

4 金子亨・藤井康子「スペインの美術教育の現状

I 一教科書分析を中心として ①初等教育の段階一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系57』2005, pp.133-146

5 同上, p.141

6 同上, p.141

7 同上, p.141

8 藤井康子・金子亨「スペインの美術教育の現状 III 一教科書における基礎的な力の育成について (初等教育) 一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系59』2007, pp.25-42

9 同上, p.38

10 同上, p.38

11 金子亨・藤井康子「スペインの美術教育の現状 IV 一初等美術教科書にみられる教育内容の一例一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系60』2008, pp.67-80

12 同上, pp.79-80

13 同上, pp.79-80

14 前掲註 1, pp.94-97

15 前掲註 1, p.95

表 1 現行の日本の学習指導要領を基に分類した 両国の初等美術教科書内容の項目別統計

	造形遊び	絵	立体	工作	鑑賞	総数
スペイン	0	18	1	6	0	25
日本	4	7	4	5	1	21

日本の教科書は、『ずがこうさく 1・2下 おもったことを』(日本文教出版, 2011) を使用した。項目は, 現行の日本の学習指導要領を基準にし, 「造形遊び」, 「絵に表す活動」, 「立体に表す活動」, 「工作に表す活動」, 「鑑賞する活動」の五項目で分類した。

16 前掲註 1, pp.95-97

17 一例として, 日本児童美術研究会『ずがこうさく 1・2下 おもったことを』(日本文教出版, 2011) では, 工作に表す題材の「ぼうしをかぶって」(同書, pp.8-9) において, 帽子の作り方が示されている。また, 巻末資料「つかって みよう ざいうりょうと ようぐ」(同書, pp.40-43) では, カッターナイフや段ボールカッターなどの使い方が, 図や写真を用いて示されている。

18 前掲註15の表1を参照

19 前掲註 1, pp.103-105

20 前掲註 1, pp.103-105

「①自由画教育運動」については, 山本鼎の自

由画教育運動の影響が現在にも残っており、自己表現や創造性を重視するという姿勢が、現在の教科書にも反映されていると考察した。

「②玩具として認識されていること」については、戦後、「きいちのぬり絵」が爆発的人気を集めるなど、歴史的な経緯やその流行から、ぬり絵が子どもたちの生活の中で玩具として扱われてきたことを指摘した。

「③教育的効果に対する否定的な意見」については、ぬり絵の教育的効果に対する肯定的な意見と否定的な意見を取り上げた上で、現場においては否定的な意見の方が取りざたされ、授業においても相容れないものとして捉えられていると考察した。

「④評価を伴う場合の問題」については、平成20年学習指導要領図画工作編で示されている四観点（「造形への関心・意欲・態度」,「発想や構想の能力」,「創造的な技能」,「鑑賞する能力」）のうち、あらかじめ型が与えられているぬり絵の場合には、「発想や構想の能力」や「創造的な技能」の観点において問題があると指摘した。また、評価を伴った場合の技能や美的要素の要求の問題についても指摘した。

- 21 江戸子ども文化研究会『浮世絵のなかの子どもたち』くもん出版, 1993, p.174
- 22 同上, p.180
- 23 同上, p.180
- 24 肥田皓三「立版古つれづれ」『立版古一江戸・浪花 透視立体紙景色』INAX, 1993, p.4
- 25 同上, p.4
- 26 上笙一郎『マス・コミュニケーション事典』学芸書林, 1971, p.618
- 27 入江正彦『子ども遊び集：明治・大正・昭和』平凡社, 1985, p.109
- 28 ビクター・ローエンフェルド著, 勝見勝訳『子どもの絵』白揚社, 1956, pp.40-41
- 29 同上, pp.40-41
- 30 同上, pp.40-41
- 31 同上, p.41
- 32 隅敦「『創造的な技能』の評価に関する考察：材料および用具の扱い方の指導についての検証を中心にして」『美術科教育学会誌(30)』, 2009, p.207
- 33 クラフテリオ『2014小学校 生活科・理科・図工教材カタログ クラフテリオ』2014
- 34 前掲註33, p.36
- 35 日本造形教育研究会「わくわくするね ずがこうさく 1・2 上」開隆堂出版, 2012, pp.32-33
- 36 開隆堂 H23~26年度用小学校図画工作教科書「学習の内容と評価の観点【標準型】」より「標準型のカリキュラム〈学習の内容・目標と評価の観点〉 第1学年 第1・2学年①」
http://www.kairyudo.co.jp/contents/01-sho/zuko/h23/ (2015.5.19取得)
- 37 前掲註33, p.48
- 38 栗田真司・他「あたらしい ずこう：いいことかんがえた1・2」東京書籍, 2012, pp.59-60
- 39 前掲註32, pp.208-209
- 40 前掲註4, p.141

(2015年5月20日受付)

(2015年7月13日受理)